ROSARY

清澄　りしゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＯＳＡＲＹ

【Ｎコード】
Ｎ４２９７Ｃ

【作者名】
清澄　りしゃ

【あらすじ】
舞台は中世のフランス。奇怪な事件やミステリーが大好きなお嬢様とちょっと気弱な少年のお話。

透き通るような青空から猛然とした陽ざしが降り注ぎ、道行く人々を照りつける。
そんな中、市場へと向かう村道を一人の少年が歩いていた。陽の光を遮るような高い建物は一切なく、まばらに簡素な住宅が並ぶだけの通り。
男の子にしてはサラリとした金髪に蒼い瞳をもつ、優しそうな少年……ルイ・ヴェルオーズは、朝食のパンを買いに町へと出ていた。
「おはようございます」
パン屋へと入ると、焼きたてのこんがりとした匂いが漂ってきた。
「あら、いらっしゃい！こんな日にも買い出しかい」
店内に客の姿はなく、カウンターにパン屋のおばさんが一人座っているだけだった。女性の割にがっちりとした体つきをしていて、赤毛をくるりと一巻きして結いあげている。
「こんな日？何かあったんですか」
辛気くさい顔をするおばさんを見て、ルイは小首を傾げた。
「いやねぇ、昨日近くの通りで殺人事件があったらしいのよ」
「殺人事件？そんなに珍しいことでもないと思いますけど…」
何せ、ここのひとつ向こうの通りと言えば下層市民が暮らす場所である。
フランス国は、ここ数年で急激な人口増加とともに完璧な格差社会も成立した。町は通りごとに市民階級が分けられ、ちょうどこの通りで第三層と第四層の住処が区切られている。ルイは、第三層に住んでいた。数年にわたった戦争で両親を亡くし、工房の親方に引き取られた結果だ。引き取られた、というよりも、仕事を手伝う代わりに居候させてもらっているという感じだった。三層はまだしも、四層の裏路地などはひどい有様である。通りは乞食で溢れ、裏路地へ入れば死体の山が見つけられることだろう。

「そう何だけど、今回は違うのよ。何て言ったって、殺されたのはお偉いとこのお婆さんらしいわ」
そう言って、満足そうにニヤリと笑った。
「どうやら、バーンズ家のお婆さんだってねぇ。」
「バーンズ家、ですか？確かあそこはおばあさん一人暮らしのはずじゃ……」
ルイは自分の記憶からバーンズ家について引っ張りだした。
人々の間では有名な資産家で、財産権利は全て一人で住むお婆さんにあると聞いた事がある。
「えぇ、でもメイドと執事も居るしね。それに、昨日から娘が会いに来ていたみたいよ」
おばさんが声を低くして言った。
「え、じゃあ一番怪しいのは娘ですね」
考えなくても分かる。財産目当ての殺人なんて珍しい話ではない。
「そう何だけどねぇ、部屋は密室だったのよ。娘は鍵を持ってなかったから入ることは出来なかったみたいよ」
「密室ですか……という事はメイドか執事が？」
「メイドと執事にもアリバイがあるわ。だから、自殺って線が有力ね」
「そうなんですか……」
「どうゆう事かしらねぇ。うーん」
頬杖をつき真剣に考え始めたおばさんを見ながら、ルイは呟いた。
「殺人事件…謎？」
どうも最近はこの単語に馴染みがある気がしてならない。しばらく、腕を組み思考を巡らせた末、一人の少女が頭に浮かんだ。最近とある事件をきっかけに知り合った、不可解な事件やミステリーが大好きな少女。
「あ…おばさん！その話を詳しく聞かせてくれませんか？」
「えぇ、いいわよ。話しても分からないと思うけどねぇ…」
苦笑すると、おばさんは静かに語りだした。

まるで、絵に書いたようなお屋敷だった。まさに豪邸と呼ぶに相応しい建物の前に、ルイは立っていた。そびえ立つほどに大きな門から中へと進むと、美しく整備されたフランス式庭園が向かい入れる。そこを抜けると、今で言うヴィクトリア調の古典様式で統一された豪奢な造りの城が待ち構えている。

ルイは、そんなヴェルサイユ宮殿もびっくりな城の、主に会うためにここまできたのだった。

城の蝶番を叩くと、中から一人の少女が出てきた。可愛らしいメイド服を身に纏い、軽くウェーブした淡いピンクの髪は肩くらいまで。この城のメイドである。

「こんにちは。お嬢様に御用ですね」

メイドは、ルイの顔を見て嬉しそうに微笑むと中へと招いた。そして、主を呼びに二階へと行ってしまった。

部屋の中は、高そうな絵画（絵の価値は分からなかったが）や大理石の机や調度品で溢れかえっていた。棚には写真が飾ってあり、この城の主を含めた数人の人間が映っている。ほとんどが貴族だった。

「あら、お久しぶりね。何か用かしら」

突然後ろから声をかけられ慌てて振り向くと、二階へつづく階段に一人の少女が立っていた。絹糸のような金髪は高い位置で二つに結ばれ、しかし腰ほどまでの長さがある。

瞳は澄んだ蒼色をしていて、微妙に吊り上がっている。城の主、リリス・ヴェルベだった。シックな黒いドレスに身を包み、優雅な、キレのある微笑みを浮かべている。

「リリス！うん、実は話したいことがあったんだ」

ルイは再開の喜びに顔をほころばせ、少し得意げに言った。

「ふぅん。それって、面白いこと？」

「きっと、気に入ると思うよ。君の大好きな『謎』だからね」

それを聞いたリリスは、挑戦的な微笑みを浮かべ向いのソファに座

った。
「この名探偵リリス様がその謎を解いてあげるわ。もしも、つまらないのだったら承知しないわよ」
クスリと笑うリリスを見て、ルイも微笑んだ。
「そう、それじゃあ事件が起こった日の夕方の事から話始めようかな…」

窓の外は茜色に染められていた。夕日の沈みかけた空は、簡素な町並みを一色に染めている。すぐ下の広大なフランス式庭園では少女が一人庭の手入れをしていた。そんな景色を眺めながら、もの思いに耽る女性の姿があった。
女性の名は、レビィ・バーンズ。
今朝から、母親に会うために遠い異国の地まで足を運びこの屋敷へと来ていた。
「お嬢さま、紅茶をお持ちしました」
軽くドアを叩く音がした後、屋敷の執事であるニックが現れた。
「……」
レビィは、その様子を黙って見つめた。
「…お嬢さま？」
「はい、ありがとう。ニック」
声をかけられ、思いだしたかのように返事をする。
「そちらにいらっしゃいましたか。今お持ちします」
そう言うと、レビィの方へと歩いてきた。静かに、正確に目の前に紅茶を置くニックの姿を見つめた。
「いつも思うのだけれど…あなたって本当に盲目なのかしら」
驚きと賞賛の交ざった声で言うと、ニックは微笑んだ。
「左様でございます」
「流石ね。お母様は、どちらに？」
「ロクシェーヌ様は私室でお仕事をしています。夜まで入らないよ

うにとの事です」
「そう…。いつもそうね。娘が来た時くらい仕事をお休みになってはいけないのかしら」
少し不服そうに言うと、紅茶を一口飲んだ。
「おいしいわ。ありがとう」
「いえ、それでは失礼致しました。ご用の時はいつでも呼んで下さい」
そう言い残すと、静かに部屋を出て行った。

部屋を後にしたニックは、庭の手入れをするため外へと向かった。
視覚はないが、長年使えているため屋敷のことはほとんど把握しているため、足取りに迷いはない。
庭園に入ると、そこには既に先客がいた。
「おや、ミリアか」
いつもの気配で城のメイドだと判断する。
「まぁ、庭園のお手入れは私の仕事よ」
ミリアはニックを見ると、怪訝そうに言った。
まだ幼さの残る顔立ちに、黒いブルネットの髪を肩まで伸ばした少女だ。
「いや、すまないな。先ほど屋敷で君に似た気配を感じてね。気のせいだったようだ」
ニックが苦笑して言った。
「私はお昼からずっと此処よ？それに、此処からお城までそんなに早く行けるはずないわ」
微笑みながら言うと、ミリアは作業を再開した。

「で、まだ何も起きないの？」
リリスが尖った声で言った。既に何杯目かの紅茶を飲みほし、ルイ

が持ってきたパンに手を付け始めた頃である。
「これからだよ。この日の夜に事件が起きるのさ」
「そ、じゃあ話して」
偉そうに言って、続きを促した。
「はいはい。その日の晩……」

その日の晩、ミリアはいつものように主であるロクシェーヌの私室へと向かっていた。この時間になると、甘いミルクティーとスコーンを持って行くのが常だった。
「ロクシェーヌ様、紅茶とスコーンをお持ちしました」
ドアを数回軽く叩き、主が出てくるのを待った。しかし、部屋の中からは物音ひとつしない。試しにドアノブを回してみたが、鍵がかかっている。
「……ロクシェーヌ様？」
もう一度呼びかけたが返事はない。このまま立っている訳にもいかないので、鍵をあける事にした。屋敷の鍵は、全てニックとミリアに持たされている。ミリアはポケットから小さな錆着いた鍵を取り出し、鍵穴に挿し込む。
「失礼しますね」
そう言って、ゆっくりとドアを開いた。部屋は真っ暗だった。
しかし、部屋の中央で黒い物体が静かに揺れているのが分かった。ギシ、ギシと微かに音が鳴っている。
「ロクシェーヌ…さ、ま？」
異様な気配に気圧され、ミリアは消え入りそうな声で呟いた。返事はなく、声は暗闇に染みて消えてしまう。ようやく、目が闇に慣れてきたのか視界がはっきりとし出した。そして、その光景を見た。
「キャアアアアアア……！」
手に持っていたトレーが落ち、カップが割れ辺りに散らばった。しかし、そんな事も気に掛けずミリアは狂ったように絶叫し続ける。

そんな様子を、部屋の中央にぶら下がったロクシェーヌが生気のない瞳で見つめていた。

夜の帳が降り、町中から自然の光が消え、墨をひっくり返したかのような黒に塗りつぶされた空。その景色を窓越しに眺めながら、リリスはルイの話に耳を傾けていた。

「それで、死亡時刻は発見の4、5時間前らしいよ。つまり、夕方頃って事だね」

ルイは、淡々と事件の詳細について話す。

「ねぇ、気になってたんだけど。あなたこの話どこで聞いたの？」

「え？パン屋のおばさんだよ」

「……そう」

リリスは、視線を落とし何ごとか考えていた。

「まぁ、どうしてこんなに色々知っていたのか気になったけどね」

「まぁいいわ。それで、死因は？」

何か思いついたのか、小さくほほ笑むと続きを促した。

「え、えっと、窒そく死だって。多分、首つりが直接的な死因だろうね」

「それで、殺害時刻の容疑者のアリバイは揃っているって訳ね」

「そう。だから、自殺かとも思ったんだけど…。仕事も成功していたみたいだし、動機がないよ」

お手上げさ、という様に軽く首を振って言った。

「それだけじゃないわ。聞くと、それは豪勢なお屋敷だったそうじゃない。恐らく天井も低くはないはずよ。老人が天井から縄を垂らす何て容易じゃないでしょう」

「うーん、それじゃあ一体誰が…」

「そうね…」

思案している時のクセなのか、髪の毛をくるくると指で巻いている。

「流石の君も分からないんだね」
それを聞いたリリスは、眉を吊り上げ、ルイをひと睨みした。
「ちょっと、何言ってるのよ。私に分からない謎何てないの！」
「え、じゃあ分かったのかい？」
ルイが驚いて聞く。
「ま、まぁ…あと少し情報があれば分かるのよ。現場写真さえあれば、ね」
そう言って、ニヤリと笑った。

次の日。ルイは朝早くからヴェルベ邸へと来ていた。結局、昨日の晩は真相を教えて貰えず、明日来い、とだけ言われ帰らされたのだった。
「本当に真相何て分かったのかなぁ」
そう言いながらも、早足に庭園を通り抜け城へと急いだ。途中でメイドに会い、笑顔で城内に迎え入れられた。
「あら、早かったわね」
「うん、真相が気になって仕方なくってさ」
「それじゃあ、特別に昨日の事件の真相を教えてあげるわ」
会うが早いが、リリスが得意気に言った。そして、メイドに一枚の写真を持って来させる。
「例の現場写真よ。お金って便利ね」
リリスの言葉を聞き、おそるおそる写真を見た。そこには、やつれた老人の死体が写っていた。目は今にも飛び出そうなほどに見開かれ、舌がだらりと垂れている。首には縄がくくり付けられ、縄は天井へと伸びる。死体の少し後ろには、小さな台が置いてあった。古めかしい装飾の、清潔に掃除された小ぎれいな部屋だった。
「……きれいな部屋だね」
自分でも的外れな感想だと思ったが、それ以外に言葉が見つからなかった。

「そう、きれいなのよ。きれい過ぎる。そこが問題なの」
しかし、リリスは満足げに微笑んだ。ルイは再び写真に視線を落とした。
「問題はないように思えるけど」
「いい？普通、首つりをした場合は部屋がこんなにきれいなはずがないの。首つりって、一番汚い死に方だって言われているのよ。つまり、普通ならば臓器や排出物で部屋が汚れていなきゃおかしいって事よ」
「なるほど。……てことは、どういう事？」
ルイは小首を傾げた。
「だから、死因は首をつったからじゃないって事よ！」
「え、それじゃあ一体…？」
「恐らく、殺害後に首をくくらせたのね」
リリスはそう言って、人差し指を立てた。
「ここで疑問がひとつ生まれる訳ね。他殺だとして、全員アリバイが揃っているのに、一体誰がお婆さんを殺したのか？」
「うん、そうだよ。娘はそもそも私室の鍵を持ってないし、執事と会話をしている。執事はその後屋敷から少し離れた庭園でメイドと会っている。それに、執事さんは盲目だから犯行は不可能だろうね。そして、メイドは…庭園の手入れをしているところを娘が見ているし、執事とも話した。もしリリスの言うことが正しいとすれば、少女に犯行は無理だよ。さっきのお婆さんと同じ理由で縄をつけるのも難しいだろうし、死体を一人で持ち上げて首をくくらせる何て、無理だと思うな」
ルイは一気にまくし立てる。対するリリスは嘲笑を浮かべ、さらりと言った。
「ふふ、犯人はメイドよ」
「やっぱり、だから……って、えぇ！？」
ルイは驚嘆の声を上げた。その様子を楽しそうに見つめ、
「メイドは双子なの。これで全て説明がつくわ」

「ふ、双子？」
信じられない、という目でリリスを見る。
「そうよ。まず、犯行時刻のこと。これは、恐らく片方が犯行を行い、片方がアリバイ作りのために庭園にいたのね。しばらくして、わざと自殺に見せつけるために首をくくらせた。確かに、少女一人の力では難しいわ。でも、二人なら出来るでしょう」
「確かに、出来なくもないな」
納得したように頷く。
「殺害方法は……推測の域を出ないけれど、ロープで首をしめたのか、袋か何かで
窒息死させたのね」
「でも、どうして双子だって分かったんだい？」
ルイが尋ねると、リリスは不機嫌そうに答えた。微かに頬に赤みが増した気がした。
「そ、それは……ヴェルベ夫人に会ったことがあるのよ！その時双子のメイドが居たの、それだけよ」
そう言って、近くの棚にあった写真を手に取った。昨日ルイがチラと見た写真だ。
「パーティーの時よ。きっと、盲目の執事には双子だと知り得なかったのね。」
「娘も知らなかったんだろうね。……という事は、リリスはこの事件を聞く前からすでに大きなヒントを知っていたことになるね」
さり気なく言ったルイの一言が、リリスの逆鱗に触れたようだった。
「ひ、ヒントがあったですって？こんなハンデが無くても分かってたわよ！」
「で、でも……」
「つまらない話だったら承知しない、って言ったわよね」
リリスは器用に片方の眉を吊り上げて言った。そして、フンと鼻を鳴らし微笑んだ。
「……覚悟しなさいよ」

「ちょっと待って！まだ解けてない問題があるじゃないか」
リリスの様子を見て、ルイが慌てて言った。
「解けてない問題ですって？」
リリスが、不思議そうに首を傾げる。
「うん、動機だよ。肝心の、犯行の動機がないよ」
「……ルイ、本気で言ってるの？」
驚いた顔で、ルイを見つめた。後ろでメイドが小さく笑った気がした。
「本気だよ。まさか、君はもう分かってたの？」
「当たり前でしょ。今の話で分からない方がおかしいわよ」
リリスが、至極当たり前のように言う。
「あの話だけで分かるの何てリリスくらいだよ」
「あら、そう。それじゃあ仕方がないから話してあげるわ。ただし、条件付きで、ね」
そう言って微笑むと、ビシっと人差し指をルイに向けた。
「条件……？」
「ええ。明日から毎日、私に面白い謎を持ってきなさい」
余裕の笑みを浮かべると、今度は偉そうに腕組みした。
「そ、そんなの無理だよ！大体そんなに事件何て起きる訳……」
「全く、自分の視点だけで物事を判断するんじゃないわよ」
リリスが小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。
「どういう意味だい？」
「昨日、あなたが話したパン屋のおばさんよ。おかしいと思わなかった？普通、市民階級程度の人間が上の事件をあんなに詳しく知っているはずないでしょう」
ルイは昨日の事を思い出した。確かに、警察しか知らない情報を知っていて、ルイに話してくれたのだ。
「でも、それじゃああのおばさんは一体……」
「推測だけれど、警察がらみの人間でしょうね。中級市民に関する事件の潜入捜査、といったところかしら」

リリスが思案気に言った。もみあげを指でくるくると巻いている。
「まぁ、あの地域は警察を毛嫌いしているからね。情報集めには最適かもしれないけれど……」
ルイも顎に手を当てて考え込む。
「じゃなくて、それよりもどうして君に謎を持っていかなきゃいけないのさ」
慌てて、脱線しそうになった思考を軌道修正する。
「それは……その方が面白いからよ」
リリスは少し視線を泳がせると、自分に言い聞かせるように答えた。
「まぁ、おばさんに聞けば色々教えてくれそうだけど、さ」
「そうよ。決まりよ、決まり！……それじゃあ、動機について教えてあげるわ」
小さく咳払いすると、半ば無理やり話を戻す。
「う、うん。どういう事？」
「一言で行ってしまえば、恨み、ね。何故、まだ幼い少女がメイド何てやっていたかを考えれば簡単な話よ」
そう言い、少し離れたところで紅茶を入れているメイドを横目で見た。メイドは、話を聞いているのかいないのか、リリスの視線には気づいていない。
「えっと、戦争で両親を亡くしたから、とか？」
自分の事もあるので、簡単に予想は出来た。リリスは小さく頷くと、淹れたばかりの紅茶を口に運んだ。
「実際のところ、この戦争でいい思いをしたのは私たち上級市民だけだもの。戦争に駆り出された訳でもないのに、お金だけはたくさん入ってきた……」
上級市民が直接的に悪い訳ではない。しかし、戦争で両親をなくした少女が、得をしただけのお金持ちの屋敷でメイドをするなんて報われない話である。
「なるほどね……。うん、動機も分かった」
ルイは、暗い雰囲気を払拭するかのように明るい声で言った。そし

て、小さく息を吐くと静かに立ち上がった。
「もうこんな時間だ。そろそろ帰らなきゃ親方に怒られちゃうよ」
「そう、もうそんなに……。それじゃあ、約束ちゃんと守りなさいよ？」
リリスも立ち上がると、小さく微笑んだ。
「もう、分かったよ。仕方ないなぁ……」
ルイはブツブツと文句を言って、背を向ける。しかし、その顔には優しい微笑みが浮かんでいた。

（後書き）

読んでわかる方もいるでしょう。この小説は富士見ミステリー文庫の「ＧＯＳＩＣＫ」を参考書にして書かれています。

もともと、もう一人ヒロインの居る長編で書いてたのを無理やり番外編として短編にしたものですので、設定が穴だらけとなってしまいました。

まだ初心者ですが、少しでも楽しんで頂けたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4297c/

ROSARY

2011年1月19日01時11分発行